

# 近代日本の国家形成と歴史学 黑板勝美を通じて

## 一 はじめに

黑板勝美は帝国日本における代表的な歴史家であり、彼が近代日本史学に与えた影響は計り知れない。しかし、米国の日本史研究者の間では彼の業績の詳細がよく理解されていない。植民地史・博物館学史・史学史のような黑板に直接関係のある特定分野の研究者、あるいは黑板の『国史の研究』を頼りにアジア太平洋戦直後に日本史を学んだ年配の学者たち以外では、黑板の名前すら知らない人もいる。彼の業績を包括的研究しようという試みは近日出版予定の私の本が初めてといえよう<sup>①</sup>。

この黑板、そして史学史全般への関心の薄さは、最近活発な文化史や自然環境史などの研究分野とは対照的である。それに加えて、英語圏での日本史学史は戦後史学史の大家・大久保利謙の影響が<sup>②</sup>いまだに強い。大久保利謙は黑板の弟子であり、彼なりの理由があつて恩師が日本史学発展に貢献したことを曖昧にした。従つて、大久保に倣う歴史家たちは黑板について殆ど語らない。この大久保史学に批判的な研究者でさえアカデミズム歴史家を語る場合、大久保が取上げた歴史家に注目する傾向がある<sup>③</sup>。他方、韓国・朝鮮研究者たちは植民地史学という限られた角度からだが、黑板について鋭い観察をしている<sup>④</sup>。

英語圏の日本史研究者はさまざまな面で日本の同僚を頼りに仕事を進めている。我々の役目は、日本ではできない研究をし、外からの見解を提示し、英語で出版することにより日本史へのアクセスを世界に広める

## ヨシカワ・リサ

ことである。日本史の大御所の批判的研究はこの範囲に入るだろう。実際、日本でも最近までそのような黑板研究は行われていなかった。その背景には、またもや大久保史学史の影響がある。

大久保史学史は、第一世代の国史家重野安繹と久米邦武が一九世紀末に近代歴史学を設立しようとして、国家の弾圧に対抗したことを讀める。彼らは物語や神話ではなく史料考証に基づく学術（科学）的な歴史を擁護し、帝大から追放される。そしてこの敗北により史学史上の殉教者的存在となる。この見解に立てば、一九四五年以前の歴史学の発展は失敗に終わる。その中で、学界対天皇制国家、学問（科学）対国民教化（神話）などあたかも双方相互性がないような枠組みが作り出される。そして前者が後者に吸収されるかたちで、平泉澄など、所謂戦中の皇国史観歴史家が現れたこととなる<sup>⑤</sup>。

大久保史学史において、黑板や三上参次・辻善之助ら第二世代の歴史家は、第一世代後退後の史料編纂掛（後に史料編纂所）で黙々と史料集めと考証に専念していたと語られている。彼らによる基礎史料の蒐集は戦後歴史学へ貢献したと評価されている。一方、戦後のマルクス主義歴史家たちは、この第二世代の思想的貧弱性が戦時中に超国家主義に歴史家たちが対抗できなかった背景にあると批判する<sup>⑥</sup>。ここ数十年で黑板たちの文化事業を批判的に取上げる研究も出てきたが、大久保史学史の枠組みは健在であり、史学史研究においては重野や久米が注目され続けて

いる。<sup>7)</sup>確かに第一世代の奮闘を評価しなければならぬが、彼らの敗北に注目しすぎることもまた、今日再検討の必要が生じている。

最近、このような問題意識によるものか、大久保史学史の枠組み自体を疑問視する研究発表が増えている。たとえば、松沢裕作氏は重野や久米らが修史事業の政治性・財政面において現実的な態度をとっていたことを見出し、大久保史学史に比べて明治中期歴史学界をより複雑に描いている。<sup>8)</sup>廣木尚氏は『国史の研究』や南北朝正閏問題の時の発言に注目し、黒板がアカデミズム史学の卓越性の再確立を試みていたと論じる。この研究の中で、黒板がいかに「科学的」歴史を用いて国民教化や国家顕彰の正当化に貢献したかを検討している。<sup>9)</sup>そして斎藤智志氏は黒板を含む「アカデミズム」歴史学者が史蹟保存のため、学術と顕彰の理論的対立を調和し、新しい意味での史蹟保存や発掘事業に取り組んだと指摘している。<sup>10)</sup>

本報告も同様の見地より、黒板を中心にして広範囲・長期的な視点から、戦前の日本史学の発展を論じる。彼の多分野での業績を比較研究することにより、黒板の歴史学界への貢献度を解明する。本稿では、近代歴史学の論理やその有用性、そしてアカデミズム歴史家のもつ社会的重要性への認識の高まりにも着目する。一九世紀後半段階の日本では、レオポルド・ランケ由来とされている歴史研究法の論理は、専門家以外には知られておらず、アカデミズム史学の歴史観が卓越していたと言いがたい。一九二〇年代になると、事態は変容している。この変化がどのようにして起こり得たのかを検討していく。

黒板の世代は文献蒐集・出版以外にも史蹟遺物の研究・保存、歴史著述、史的顕彰、植民地史学、博物館建設その他にわたり、歴史事業の政治的・財政的困難を理解し、克服し、政財官界の協力を得ながら歴史学の発展に貢献した。彼らは学術的にも政治的にもバランスをとりながら

史料探求・鑑定・研究・選択・保存に従事し、多彩な史料の保存に成功した。この選択は、彼らを大日本帝国の思想的建設者たらしめた。日本の歴史学の発展は、独裁的な天皇制国家と暴虐な植民地帝国の形成の一端を担った。国民教化・植民地政策に歴史家が必要であった以上に、歴史学の発展には国家の協力が必要であった。

アジア太平洋戦争後の歴史家たちは、日本の戦争責任を問う優れた研究を数々発表してきた。それらは軍隊、政治家、官僚、そして「草の根ファシズム」などが如何に帝国主義・国家主義的行為に関与したかを明らかにした一方、歴史家への自己批判は少ない。<sup>11)</sup>意図的であれなかれ、大久保たちが黒板世代の業績を曖昧にすることにより、恩師の助手として大日本帝国の歴史的肯定に参与した事実の隠滅や戦時中に皇国史観の担い手になった国史学の名誉挽回に成功する。そして恩師の名誉保護にも貢献する。黒板たち国史第二世代は、歴史学をこよなく愛し、その基礎確立のために奔走し、たくさんの弟子を育てた。日本史学は今でも彼らの業績に負うところが大きい。今日の日本史研究者は、良かれ悪かれ、黒板と共通点をもつ人が少なくない。自己批判とは難しいものである。

## 二 若手研究者時代の意気込み

黒板は臨時編年史編纂掛が閉鎖された一八九三年に帝大に入學する。重野や久米が実質的に解雇された直後のことである。修史事業の国家建設への有用性が疑問視され、今後の国史学への政府の援助の見通しが立たなかった。<sup>12)</sup>このように歴史学の前途が不透明な中で学生生活を送った黒板世代は、この状況を変えて国史学を発展させるため、資金や信用の確保に奔走する。

第一世代のごとく、黒板世代も近代歴史学に不可欠な史料の蒐集・編纂は政府からしか得られない莫大な費用と政治力が必要なのは承知し

ていた<sup>14)</sup>。政財官界の理解を得るため、まず近代歴史学研究法の論理を広めて国家・帝国建設における歴史学の必需性を訴える。この姿勢を反映するものか、黒板の最初の学術論文は北畠親房関連史料の考証的研究である。帝大同級生笹川種郎とともに親房の天皇擁護の史実性を肯定して賛賞する。そして南朝正閏を主張し、アカデミズム歴史学の国民教化への有用性を仄めかす<sup>15)</sup>。

大学院進学後の黒板の言論は積極性を増し、例えば空海の生涯を通じて明治末期の仏教宗派間論争を、そして池田光政の風教を通じて明治国民の贅沢ぶりを非難し、坂下御門外一件を通じて差し迫った内地雑居への懸念を明らかにする<sup>16)</sup>。坂下御門の論文は特に興味深く、一件にまつわる文献を幾つか選択して現代語訳し、水戸浪士を英米の外敵および安藤信正なる内敵から日本国を守る勇者として位置づけた。これらの刊行物を通じて黒板は反リベラルな立場より、明治後期の思想問題が国民の自己中心性に由来すると提示する。とくに「坂下御門外一件」においては、近代歴史家は如何に史料を活用するか、史料は如何に活用できるか、を論じて歴史学方法論と政治的実用性を示す。黒板は帝大助教授に任命された後も、このような講演や刊行物に着手し続ける。

このような背景のもとに黒板の博士論文「日本古文書様式論」を読むと、古文書学体系化以外の側面が表れる。この論文の中で黒板は、日本古文書は中国より影響を受けたが鎌倉時代には既に日本独自の様式が普及していた、さらに明治期の歴史家はヨーロッパ近代歴史研究方法を取得していた、と語る。したがって、日本には中国よりヨーロッパ式の古文書分類法のほうが適切だと訴える。同じ論法を用いて、日本のアカデミズム歴史家を東洋の学問的先導者とし、この地域の史料管理を日本人に託すべきだと提案する<sup>17)</sup>。まさに岡倉天心と同様、日本人学者を東洋文化の宝庫番として位置づけた。これにより、日本帝国と日本の歴史家は同

じ使命を持つこととなり、前者に後者が必要だと黒板はほめめかす。日本帝国の使命について、黒板は日露戦争前のロシア帝国の脅威と一三世紀の蒙古襲来との類似性を指摘する。それを指摘した上で、すでに近代軍事力を有する明治国家が北条時宗のように地域平和を確保する義務があると促す<sup>18)</sup>。初版の『国史の研究』においても、過去に中国と欧米両方から影響を受けて発達してきた日本は、特殊であるが故に東洋の先導者になるべきだと語る。そして黒板はこの日本文化を皇室の歴史的存在に由来するものとして論ずる。

このような史観は『国史の研究』の時代区分に表れている。黒板は時代区分を人工的で主観的なものとする。その上で国史を氏族・律令・武家・明治に時代区分し、それぞれ日本文化発達期・中国文化輸入期・中国文化日本化期・欧米文化輸入期として位置づけた<sup>19)</sup>。そして同期の内田銀藏・原勝郎たちが用いたヨーロッパ史に基づく時代区分の普遍性を否定した<sup>20)</sup>。黒板が主張したのは、最も東洋の平和保持の先導者にふさわしいのはロシアのようなヨーロッパの帝国でなく、東洋文化圏内で発達してきた日本帝国であるということであった。それゆえ、日本帝国には北東アジアの文明開化に着手する義務があると訴えていた。同様の欧米批判は、エスペラント運動で黒板が試みていた英仏語世界征服の阻止にも表れている<sup>21)</sup>。

『国史の研究』は出版当時から近年まで、第二部である通史叙述よりも第一部の史学研究法概観が注目されてきた。しかし、この書的重要性はこの二部を一冊として出版したことにあり、それにより大日本帝國建設を擁護する通史の近代学問性、「科学」性を主張した。当時この試みに気づいた書評は少ない<sup>22)</sup>。この事実は、黒板が如何に上手く国史への金銭的・政治的援助の有意義性を読者に見せしめたのかを立証するものである。

このように黒板史学の特徴は、その初期より学問と思想的國家形成の両立にあった。双方に矛盾はなく、むしろ切り離せないというランケやプロイセン学派と同様の見地より歴史学の発展を試みた。黒板の歴史学への貢献は、この段階で既に明らかである。田口卯吉の『国史大系』『続国史大系』編纂への関与などもその一環であり、近代史学の根本である史料の利用の便を図り歴史学に活気を与えつつ、史料編纂掛の史料独占状態を公然に批判した<sup>(23)</sup>。編纂掛の史料蒐集や編纂に関わりながらも、公共の古文書館建設や考証に留まらぬ幅広い歴史研究の必要性を提唱した。

さらに黒板は歴史学の強化のため、所謂補助学の発達にも協力し、一般雑誌での歴史学研究法の説明や裁判での筆跡鑑定の仕事を通して近代歴史学の存在と重要性を提起した<sup>(24)</sup>。しかし、この段階で歴史学の権威が確立したとは言いがたい。黒板は京都大徳寺所有の考案鑑定の際には、異議を申し立てられている<sup>(25)</sup>。そして国史への金銭的・政治的援助はまだ少なかった。このようなアカデミズム歴史学の立場は、徐々に変わっていく。

### 三 日露戦争と第一次世界大戦

日露戦争後、世界・地域情勢の変容そして国内思想や社会問題の増加に対抗する国民教化の必要性が一層騒がれ、黒板たちはその中でアカデミズム史学の有用性を訴え続け、それは認められていく。この時期、黒板は欧米國家をはじめトルコやエジプトなどを視察した<sup>(26)</sup>。欧米歴史学者との交流を通じて、日本の歴史事業の根本的遅れを痛感し、その克服を試みた。将来の日本アカデミズム史学界への期待も膨らませていた。

この外遊により黒板の世界観は激化する。大英帝國の世界支配やドイツやアメリカの先進性を見て感心する反面、これらには有色人種差別によ

り実現していると結論する。特に米國での日本人排斥やエジプトでの英國人の植民地主義を批判し、黒板は反英米精神を高めた<sup>(27)</sup>。帝大同期の宗教学者姉崎正治も、ドイツで同様の体験をしていた<sup>(28)</sup>。ただし、黒板は英米から学ぶべき点が存在することも認めている。同時期に外遊し、明治後期の社会思想問題を文明開化期の無差別西洋文化輸入に見出した夏目漱石や森鷗外と似た結論に達していた<sup>(29)</sup>。

黒板は、欧米では史蹟保存や博物館事業による愛國心向上の効果により思想や社会問題、そして歴史事業の遅れを回避・解決していると訴える。これらの事業は同時に一般国民にアカデミズム史学の方法を広め、歴史的「史料」の定義を拡張し、その史料保存を目的とする上で歴史学の発展に貢献するとも意見している<sup>(30)</sup>。文献以外の史蹟・遺物・遺跡の研究の重要性は同級生の喜田貞吉も主張している。黒板がこのような主張をしたのには、各国を代表する専門家たち、例えばドイツの日本学者オスカー・ナホッド、東洋学のハーバート・ジャイルズ、ギメ東洋美術館創設者のエミール・ギメなどと学会で交流した影響があったと考えられる<sup>(31)</sup>。

帰国後の黒板は、日本歴史学界の遅れを取戻そうと奔走する。考古学会での活躍や西都原古墳での日本初の大規模学術的発掘への関与のほか、筆跡骨董鑑定などの仕事も増え、専門家としての評判が高まる。そして、幸徳秋水事件後の社会主義・無政府主義撲滅運動の一環として警視庁で特別エスペラント講義を行い、反リベラル体制に協力する<sup>(32)</sup>。

南北朝正閏問題はこのような黒板の多忙期に起こった。黒板はこの問題において、アカデミズム歴史学がほかの学問分野と比べて卓越していることを示した。彼は穂積八束の「習慣」論や、井上哲次郎の倫理的解釈などを否定し、文献に基づく議論で南朝の正統性を擁護した。姉崎正治は残存史料の南朝偏見を批判し史料中心の近代歴史研究法を問題視す

るが、黑板はその複雑さを語り対抗した。<sup>(33)</sup>南北朝問題を契機に多彩な人脈と交流し、歴史事業の後援者を確保した。所属した国体擁護団員たちとは正閏問題が一段落ついた後も友声会を設立して南朝支持の運動を続けていた。<sup>(34)</sup>

南北朝正閏問題後、教育団体からの後援要請が増えるなど黑板の知名度はさらに上がり、彼自身も積極的に学童向けの書物にて皇室擁護論を呼びかけた。そして『国史の研究』改訂を通じて、歴史学と国民教化の相互性をますます積極的に示した。

黑板はこの頃出版された津田左右吉の『神代史の新しい研究』など紀神話の史実性を疑問視する書物に危機感を抱き、『国史の研究』の第二版では初版で曖昧にしていた日本人の多民族起源説を論じた。改訂の根拠として白鳥庫吉の言語学や高木敏夫の民俗学などをあげ、神話研究の学術性を主張した。この黑板の新見地は外遊中のトロイア遺跡見学の影響もあった。<sup>(35)</sup>一九世紀のシュリーマン氏による遺跡発見がホメーロスの神話の史実性を証明した経緯に黑板は興味を示し、『記紀』の内容も同様に考古学研究で確認できるという期待を抱いた。皇室神話による国民教化の有用性を強調することにより、政財界や他の学者たちに古蹟発掘による学術的な古代史研究の必要性を訴える。

黑板の著書は『国史の研究』に限らず、政治性を増していく。明治期を歴史として語るにあたり、日清戦争前を不平等条約改正のために全てを犠牲にした時代だと位置づけ、自由民権運動や政党政治の誕生を有害な副産物だと否定した。大正政変の最中に書かれたこのような論文は政変への間接的批判以外何者でもない。彼は日清戦争後こそが真の明治のレガシーだと賞賛した。英米批判の激化である。<sup>(36)</sup>

中国非難も加速した。清朝の衰退、孫文による共和主義を主張する中華民国の建国、そして内戦勃発にあたり、大陸から日本への歴史的影響

を認めることへの抵抗感が高まっていた。皮肉にも黑板の通史において無差別な明治初期の欧米文明輸入は中国文化の影響を除去するための必要悪であったとされた。<sup>(37)</sup>大正初期に始まる黑板の聖徳太子顕彰運動は、この反英米・中国精神を反映したものであった。日本文化と矛盾がないよう賢明に中国文化を輸入した太子を英雄に祭り上げ、無差別に欧米文化輸入を続けていると大正国民を批判し、太子の精神に倣うように促す。<sup>(38)</sup>

ランケやプロイセン学派が歴史は神の采配の表れであるとして、近代歴史学によるプロイセン（後にドイツ帝国）の特殊性・卓越性の確立を目的としたのと同様に、黑板は聖徳太子に代表される日本の精神を国史上に見出し、日本帝国の思想的基礎の建設を試みた。聖徳太子顕彰の利点は、残存史料の少なさのために、史実が学術的に肯定も否定も出来ないことであり、黑板は新史料発見まで旧説に基づいて憶測するしかないと結論する。一方、神道家・国学者などを過去の善点のみに着目する偏狭な「小愛国者」と批判し、自身の見解の学術性（科学性）を主張する。大正の日本国民は過去の善悪を識別する力が必要であり、その指導をアカデミズム歴史家が担うべきだと論じる。そして万世一系の皇室を有し、世界でも比例なく優れた日本史の研究は、世界史への貢献も多大だと述べる。<sup>(39)</sup>

黑板はこの国史学・国史学者への期待を実現しようと、史蹟名勝天然記念物保護法設立のために尽力し、植民地朝鮮でも同様の事業を進めた。内地・外地双方で発掘や保存を進め、学術的にも国民教化・植民地主義肯定のためにも重要な史料の確保を試みた。<sup>(40)</sup>朝鮮では総督府の経費削減後、私費まで費やして発掘事業に取組んだ。一九三〇年代には朝鮮古蹟研究会を設立して研究費集めに奔走した。この会の学術的貢献の大きさはエドウィン・ライシャワー氏も絶賛していた。<sup>(41)</sup>

黑板の史料整理・目録作成・保存への献身ぶりは、京都醍醐寺の整理、日光東照宮・高野山の宝物館建設等にも及んだ。<sup>(42)</sup>このような政府や地方自治体の事業に黑板は専門家として拔擢されていた。このことは、近代歴史学の政治的有用性が理解されはじめるとともに、黑板が先駆者として認められ、そして政治思想的にも信頼される人物になっていったということの意味する。第一世代が追放された一八九〇年代に比べれば、大正中期には国史学も政府の信頼を取り戻しつつあった。この上昇傾向はアジア太平洋戦争期まで続く。

#### 四 大戦後の活動

第一次世界大戦後のウィルソン主義の影響は、朝鮮の三一運動として表れて朝鮮総督府に政策変更を強い、内地では大正デモクラシーがピークに達して国家主義者や皇室主義者を脅かした。このような状況下で黑板たち歴史家は、政官財界のリーダーたちとともに歴史事業を通じて国民教化を遂行した。

歴史上の人物の近代的顕彰は明治に遡るが、大戦後にそのスケールは増した。黑板は顕彰運動を指揮する度にそれを歴史学の発展にも繋げていく。聖徳太子奉賛会や太子一千三百年御忌奉賛会についての彼の事業が良い例である。法隆寺住職の依頼に応じ、黑板は太子関連の儀式復活のための資金集め・後援者確保・奉賛会発足を経て、記念行事計画を進めた。一九二一年には展覧会などを含む一大スペクタクルを実施し、大成功を収めた。

祭典の中で、黑板たち奉賛会員は太子を皇室及び日本中心主義の先駆者として讃え、イエス・キリスト、釈迦、プラトンと同位置に置く。祭典終了後には、寄付金の余剰金を用いて古代文化全般の研究・保存・教育機関を設立した。この機関（聖徳太子奉賛会）は七〇年以上続いたが、

様々な学術研究を出版し、法隆寺の防火装置設置、昭和の修復作業や宝物館建設にも着手した。<sup>(43)</sup>

この時期の黑板の文化事業は、彼の天皇制国家擁護を批判する研究で取上げられている。大戦後の黑板が帝大の興国同志会の顧問になったことも、この傾向の一つといえる。<sup>(44)</sup>しかし、黑板が太子奉賛会を任されたのは、黑板のアカデミズム歴史家という立場、そして学問的歴史学が重視されていたことを意味する。黑板の参加により、記念行事にある種の「科学的正当性」が加わることが認められ、アカデミズム歴史家の見解が卓越したことを意味した。この正当性の見返りとして、国史学への援助が確保された。このようなギブ・アンド・テイクの関係は黑板の朝鮮史編纂事業でも見られた。<sup>(45)</sup>

一九二四年から政府は大幅に史料編纂掛の予算を増額した。辻善之助が事務主任になって予算増額を交渉しはじめて五年目のことである。提出された要望書は、歴史学、特に編纂掛の研究成果の果たす国家教化への実用性を訴えている。関東大震災後には天災による史料湮滅の可能性も例にあげて、編纂の急務性を唱えている。黑板たちの活動がどこまでこの予算増額に影響したかは明らかではない。<sup>(46)</sup>しかし、帝国議会議員には黑板たちとともに事業に携わった者が多数いたことは確かである。アカデミズム史学の卓越性への認識の定着が間接的に歴史学への援助拡大に繋がった可能性も大きい。

大正末になると黑板は、第一次共産党事件で検察側の筆跡鑑定証人を務め、貴族院議員への国体についての講義などを通じて、政財官界との親密度を増していく。<sup>(47)</sup>歴史学界においては、史観の多様化、特に津田左右吉や本庄栄次郎による記紀神話や史的皇室中心性の否定に対抗するたため、黑板は『国体新論』を出版した。

『国体新論』において黑板は『記紀』を国体の源とみなし、日本帝国

の卓越性を賛賞した。黒板にとってこの史観は以前のものの延長線上にあり、この書において彼は専門家としての権威を使って皇室・日本中心主義を一般に広めようとした。<sup>(48)</sup>結果として、この著作は黒板が以前に問題視した小愛国者からも、さらに黒板を小愛国者であると非難する者からも、批判された。前者は黒板の学問性に尊王心が不足していると訴え、後者は黒板の史実無視を指摘した。黒板は南北朝正閏問題や聖徳太子奉賛会の時と同様、史料不足の時代の歴史は、憶測に頼らざるを得ないの、どの学者のものも妥当だと反論する。<sup>(49)</sup>

この書は黒板を、井上哲次郎や上杉慎吉同様の国体学の権威の一人と成らしめた。陸軍士官学校などからの講演依頼が殺到し、一九三六年には『国体の本義』編纂委員に抜擢された。これらの業績をもって、黒板は一九三〇年代に歴史学を最盛期へと導いた。

## 五 国史学最盛期

昭和初期になると、国民教化においてアカデミズム歴史学者が欠かせなくなり、学者にとって史的事業の資金集めが比較的容易となった。日本歴史界も栄え、黒板の弟子たちは、日本帝国のあらゆる歴史事業に関与していった。

黒板の弟子たちは、第二回外遊で黒板の不在中、さらにその帰国後も引き続き、帝国内で恩師の歴史学事業を支え続けた。黒板の多忙なスケジュールは大規模な歴史事業のかたわら、昭和天皇への歴史講義や上野動物園のキリンの名付けコンテストの審査委員にまで及ぶ。<sup>(50)</sup>この時期に黒板が編纂指揮した日光東照宮史、台湾製糖社史、東京府史、鹿児島県史などからは、専門家による組織史編纂への関心の高まりも伺える。

大学でも、昭和初期の東京帝大の国史学科の学生数は、それだけで明治・大正期を通じた総数に匹敵した。東京・京都以外の五つの帝大でも

一九二〇―三〇年代に初めて国史の講座を設けている。<sup>(51)</sup>そしてこの頃、三上・黒板・辻はラジオ放送の歴史講座などにも出演している。<sup>(52)</sup>

この歴史学人気に便乗してか、数々の出版社が黒板に大規模事業の監修を依頼していた。『新訂増補国史大系』や『岩波講座日本歴史』（初版）もこの時期に開始されたものである。前者は、黒板が培ってきた人脈を用いて多くの稀文書を校訂に利用し、より完全なテキストを専門家に提供する史料集の編纂に挑んだものである。その刊行を通じて、史料中心の歴史学研究法の卓越性が示された。後者は一般国民に学術的知識を広める目的のものであり、学界の多様さを披露する契機となった。

黒板は国外への日本史の普及にも挑戦する。弟子の皇族・筑波藤磨の卒業後、筑波の事業として国史研究会を設立させ、学界動向を海外研究者に報告するという計画を立てるほか、研究上の交流があるイェール大学東アジア図書館長の朝河貫一等の依頼により日本史料を蒐集し大学図書館に寄付する事業を行なった。<sup>(53)</sup>前者は成功に至らなかったが、後者の成果であるY A Jコレクションは今でもイェール大学で日本歴史家養成のために活用されている。

この時期に黒板が設立した日本古文化研究所の業績は多い。藤原宮跡の発見・発掘などの仕事は、黒板を日本版シュリーマンになる夢に一歩近づけた感がある。<sup>(54)</sup>

一九三〇年代には南北朝正閏問題の時の同志とともに、皇国顕彰事業を計画・実行し、聖徳太子奉賛会の時のように事業を学問の発展に関連づけようとした。例えば、後醍醐天皇と南朝忠臣の顕彰事業においては太子記念に勝る派手な行事を遂行し、ある行事では毎日新聞社に宣伝かたわら飛行機で上空から祝賀冊子をばらまかせた。後日、同新聞社に「お札」としてであろうか、藤原宮跡の航空写真撮影を依頼した。<sup>(55)</sup>

紀元二千六百年祭計画の際には、政府を説得して総合日本史研究機関

の建設を進めた。研究と国民教化の双方における利点を訴え、建設費数百万円（現在換算で数十億円）を確保した<sup>(56)</sup>。黒板が病に倒れたためにこの事業は中止となるが、歴史学への国家の期待が表れている。この計画は弟子の坂本太郎が受け継ぎ、現在の国立歴史民俗博物館として実現した<sup>(57)</sup>。

最後に、一九三〇年代に出版された『国史の研究』第三版に触れておきたい。この書で黒板は全三巻を通し、日本帝国の成功を讃え、満州国建設やワシントン条約撤退なども八紘一字の使命の為に必要だと主張した。神代の皇室中心主義に戻り絶対的天皇主権の下に国家統一し、日本の世界人類への貢献を促した<sup>(58)</sup>。この書は歴史学界に歓迎され、学術的教科書として戦後に及んでも日本国内外で用いられた。黒板史学の到達点である。

黒板は、この第三版最終巻を刊行した一九三六年末に病で倒れ、歴史研究の一線から退いた。もし太平洋戦争中まで活躍していたならば黒板史学はどのように発展して、日本の歴史学にどのような影響を与えたのかは想像に任せるしかない。ただ、戦後史学史において大久保利謙のように容易に日本歴史学の発展と日本帝国建設の密接な関係を曖昧にはできなかつたのではなからうか。黒板は発病のタイミングにおいてまで日本近代史学に貢献したようである。

## 六 今後の課題

黒板の業績を通して近代歴史学発展を追ってきたが、疑問点はまだまだ多い。報告の結論として二・三紹介する。

まず、朝鮮国家紀元の思想的建設の研究においてヒュンイル・パイ氏は、植民地時代に黒板を含む日本人歴史家が確立した朝鮮史上のパラダイム及び史蹟保存事業は、今でも韓国歴史・文化事業に影響を及ぼして

いると語っている<sup>(59)</sup>。黒板たちが内地で築いた日本史研究・保存事業の基礎についても同様にいえるのか。日本帝国を支持した彼らを選び、注釈した史料がどれだけのように日本国内外で使われているのか。彼らの選択により作り出された歴史的パラダイムはどこまで現存するのか。史蹟指定では、戦後には明治天皇関係以外のものは殆ど指定解除がされていない。これらを見直す必要はないのだろうか。

第二に、黒板たちの歴史学の「科学性」とはなにか、そしてそれが明治―昭和期においてどのように変容していったのか。黒板は *scientific*ではなく、「学問性」 *Wissenschaft (ich)* という言葉を使う<sup>(60)</sup>。黒板たちの科学性への考えが同時期のドイツ歴史学者のものどのように比較できるのか。そして、歴史主義 (*historicism*) を重要視する傍ら、日本史の内に超越的な国体精神を求めていく。この矛盾をどのように説明するのか。

第三に、歴史以外の学問と国家形成との関係はいかなるものか。特に自然科学においては国家形成との関係がどのように学問形成に影響したのか。この最後の点は私の次の研究課題でもある。

### 注

- (1) Lisa Yoshikawa, *Making History Matter: Kuroita Katsumi and the Construction of Imperial Japan*, Harvard University Press Asia Center, 2017. 本報告は上記書の概観である。ここでは内容・脚註共一部掲載に留まるので、詳細は後日出版される本文を参照してほしい。尚、この報告活字化にあたってはお世話になった佐藤雄基氏に感謝する。

- (2) Carol Gluck, "Thinking with the Past: History Writing in Modern Japan," in W. T. de Bary, et al. (eds.), *Sources of Japanese Tradition*,

- 2<sup>nd</sup> ed, vol. 2, Columbia University Press, 2005; Margaret Mehl, *History and the State in Nineteenth Century Japan*, St. Martin's Press Inc., 1998; John Brownlee, *Japanese Historians and the National Myths, 1600-1945: The Age of the Gods and Emperor Jimmu*, UBC Press, 1997 ㉔㉕。
- (3) Sietan Tanaka, *New Times in Modern Japan*, Princeton University Press, 2004 ㉔㉕。
- (4) Hyung Il Pai, *Constructing "Korean" Origins: A Critical Review of Archeology, Historiography, and Racial Myth in Korean State-Formation Theories*, Harvard University Press, 2000; Pai, *Heritage Management in Korea and Japan*, University of Washington Press, 2013 ㉔。
- (5) 大久保利謙『日本近代史学事始め』(岩波新書、一九九六年)、「同」  
「ゆがめられた歴史」向坂逸郎編『嵐のなかの百年—学問弾圧小史』(勁草書店、一九五二年)所収。
- (6) 岩井忠熊「日本近代史学の形成」『岩波講座日本歴史・別巻1』(岩波書店、一九六三年)所収、門脇禎二「官学アカデミズムの成立」歴史学研究会編『日本歴史講座第八巻・日本史学史』(東京大学出版会、一九五七年)所収。
- (7) 高木博志『近代天皇制の文化史的研究—天皇就任儀礼・年中行事・文化財』(校倉書房、一九九七年)、李成市「黒板勝美に見る植民地と歴史学」『岩波講座世界歴史九・月報』(岩波書店、一九九九年)所収。
- (8) 松沢裕作「重野安禎と久米邦武—「正史」を夢みた歴史家」(山川出版社、二〇一二年)。
- (9) 廣木尚「黒板勝美の通史叙述—アカデミズム史学による卓越化の技法と〈国民史〉」『日本史研究』六二四(二〇一四年)一—三三頁。
- (10) 斎藤智志『近代日本の史蹟保存事業とアカデミズム』(法政大学出版局、二〇一五年)。
- (11) 例外として、阿部猛「太平洋戦争と歴史学」(吉川弘文館、一九九九年)、芳賀登『批判近代日本史学思想史』(柏書房、一九七四年)などがある。
- (12) 前注(2) Mehl, *History*, p. 134. 前注(8) 松沢書、七二—七五頁。
- (13) 第一世代の事については、前注(8) 松沢書、六三頁。
- (14) 黒板勝美・笹川種郎「北畠親房事蹟考」『史学雑誌』七・六一—一〇(一九九六年)。
- (15) 黒板勝美「萬農の池」『密厳教報』二〇一(一九九八年)、虚心生「備前光政の風教」『日本人』五四(一九九七年)、「坂下御門外一件」同、一〇四—一〇五(一九九九年)。
- (16) 黒板勝美「日本古文書様式論」『虚心文集・六』(吉川弘文館、一九四〇年)所収。
- (17) 黒板勝美「北條時宗祈願文」『虚心文集・三』(吉川弘文館、一九四〇年)所収。
- (18) 黒板勝美『国史の研究』(文会堂、一九〇八年)一八四—一八七頁。
- (19) 内田銀蔵『日本近世史・第一卷上冊一』(富山房、一九〇三年)、原勝郎『日本中世史・第一卷』(富山房、一九〇六年)。
- (20) 「国際語 에스ペラント・一—四」『東京経済雑誌』一三八〇—二一四号(一九〇七年)。
- (21) この指摘をした書評に「国史の研究」『史学雑誌』一九・四(一九〇八年)がある。
- (22) Felix Gilbert, *History: Politics or Culture? Reflections on Ranke and Burckhardt*, Princeton University Press, 1990; Frederick Beiser, *The German Historicist Tradition*, Oxford University Press, 2011.

- (23) 井野辺茂雄「国史大系の編纂(1)」黑板博士記念会編『古文化の保存と研究』(吉川弘文館、一九五三年)、坂本太郎「国史大系と黑板博士」坂本太郎著作集編集委員会編『坂本太郎著作集第十一巻・歴史と人物』(吉川弘文館、一九八九年)所収、黑板勝美「古文書館設立の必要」『歴史地理』八・一(一九〇六年)。
- (24) 「海江田子爵家」『朝日新聞』(一九〇七・二・二六朝刊)など。
- (25) 鮑雲老大師「黑板博士の疑問に就て」『禪宗』一四・二(一九〇七年)。
- (26) 斎藤氏もこの事に付いて発表している。前注(10)斎藤書、第六章補論。
- (27) 黑板勝美『欧米文明記』(文会堂書店、一九二一年)。
- (28) 姉崎嘲風『わが生涯』(養徳社、一九五一年)一一七―八、二二九頁。
- (29) 夏目漱石『現代日本の開化』(一九一一年)、森鷗外『普請中』(一九一〇年)。
- (30) 黑板勝美「史蹟保存に関する建議書草案」『考古学雑誌』二・五(一九二二年)、「史蹟遺物保存に関する意見書」『史学雑誌』二二・五(一九二二年)。
- (31) «Membres Présents au XV Congrès International des Orientalistes», et «No. 8.» dans *Congrès International des Orientalistes. Quinzième Session Copenhagen, 14-20 Août 1908* (14-20 Août 1908), pp.5-8; 前注(27)黑板勝美書、二四六―七頁。
- (32) 日本エスペラント運動五〇周年記念行事委員会編『日本エスペラント運動史料』(日本エスペラント学会、一九五六年)二〇頁。
- (33) 山崎藤吉・堀江秀雄『南北朝正閏論纂』(鈴木幸、一九一一年)四六二―七、五六七―八八頁。
- (34) 三塩熊太「正閏問題の解決と国体擁護団」友聲会編『正閏断案国体之擁護』(東京堂、一九二一年)所収、内田周平「南北朝正閏問題の回顧」木堂先生伝記刊行会編『犬養木堂伝』上(東洋経済新報社、一九三八年)所収。
- (35) 津田左右吉「神代史の新しい研究」(二松堂書店、一九一三年)、黑板勝美「名勝と古蹟」『日本及日本人』五三五(一九一〇年)、黑板勝美『国史の研究・総説の部』(文会堂書店、一九一三年)三〇三―五頁。
- (36) 黑板勝美「明治時代に於ける人文史的概観」『日本及日本人』五九八(一九一三年)。
- (37) 前注(35)黑板書、三二六―七、黑板勝美「朱舜水と湊川碑」『日本及日本人』五八〇(一九二二年)。
- (38) 黑板勝美「聖徳太子と十七条憲法に就いて」『東亜之光』一一・一〇(一九一六年)。
- (39) 前注(35)黑板勝美書、三二二―二五頁、黑板勝美「日本歴史之評論」『岐阜県教育会雑誌』二〇九・増刊歴史号(一九二二年)。
- (40) 藤懸静也「史蹟・宝物の保護」前注(23)黑板博士記念会編書所収。
- (41) Edwin O. Reischauer, "Japanese Archeological Work on the Asiatic Continent in 1937 and 1938," in *Harvard Journal of Asiatic Studies* 4:1 (May 1939): 87-90.
- (42) 三成重敬「醍醐寺の古文書記録などの調査」、「古谷清」日光宝物館、堀田眞快「高野山霊宝館」前注(23)黑板博士記念会編書所収。
- (43) 村田俊彦「聖徳太子奉賛会」前注(23)黑板博士記念会編書所収、聖徳太子一千三百年御忌奉賛会編『聖徳太子御伝』・『聖徳太子一千三百年御忌法用記念写真』(聖徳太子一千三百年御忌奉賛会、一九二三年)。
- (44) Christopher W. Szpilman, "The Politics of Cultural Conservatism:

The National Foundation Society in the Struggle Against Foreign Ideas in Prewar Japan, 1918-1936." PhD diss., Yale University, 1993, 39-40 and 42n.

Yale Association of Japan, "in *The Yale University Library Gazette* 9:2 (October 1934).

- (45) 朝鮮総督府朝鮮史編修会編『朝鮮史編集会事業概要』(朝鮮総督府朝鮮史編修会、一九三八年)、藤田亮策「朝鮮古蹟調査」前注
- (23) 黒板博士記念会編書所収。
- (46) 東京大学史料編纂所編『東京大学史料編纂所史史料集』(東京大学出版会、二〇〇一年)五八―七二頁、東京大学百年史編集委員会編『東京大学百年史・部局史4』(東京大学、一九八七年)五六九―七三三頁。
- (47) 「公正講話聴取」『読売新聞』(一九二三・六・二一朝刊)、「結社事件の議事録とその筆跡を鑑定」同(一九二五・四・一〇朝刊)。
- (48) 黒板勝美『国体新論』(博文堂、一九二五年)。
- (49) 里見岸雄「黒板勝美博士の国体論」『日本国体学概論』(里見日本文化研究所出版部、一九二六年)所収、松本芳夫「『国体新論』の疑点」『朝日新聞』(一九二五・六・二一朝刊)、黒板勝美「松本氏に問う・国体新論」に就いて」同(同月・二八朝刊)、松本芳夫「黒板博士の反問に答う」同(同年七・五朝刊)。
- (50) 「御講始め諸役」『朝日新聞』(一九三一・一・七朝刊)、「キリン夫婦きのう着く」同(一九三三・八・二二朝刊)。
- (51) 秋山謙蔵「明治の史学と昭和の歴史学」『歴史学研究』一・五(一九三四年)。
- (52) 「日本国史講座を九月から開講」『朝日新聞』(一九二六・八・一朝刊)。
- (53) 代々木会編『昭和八年の国史学界』(筑波研究部、一九三四年)、Asakawa Kan'ichi, "The Evolution of Japanese Culture Gift from the
- (54) 日本古文化研究所編『日本古文化研究所報告』(日本古文化研究所、一九三五―四一年)。
- (55) 丸茂謹一郎編「嗚呼忠臣」(東京楠公会、一九三五年)、黒板勝美「序」『西都原古墳の調査・日本古文化研究所報告』(一〇)(日本古文化研究所、一九四〇年)。
- (56) 丸山二郎「仮称国史館」前注(23) 黒板博士記念会編著所収、古川隆久「皇紀・万博・オリンピック」(中央公論社、一九九八年)一〇六頁。
- (57) 坂本太郎・林屋辰三郎・井上光貞「国立歴史民俗博物館(歴博)をつくる」『日本歴史』三九七(一九八一年)。
- (58) 黒板勝美『国史の研究』全三卷(岩波書店、一九三一―三六年)。
- (59) 前注(四) *Past Heritage Management*, pp.7-22.
- (60) 黒板勝美「奈良時代の文化史的観察」日本歴史地理学会編『奈良時代史論』(仁友社、一九一四年)所収。